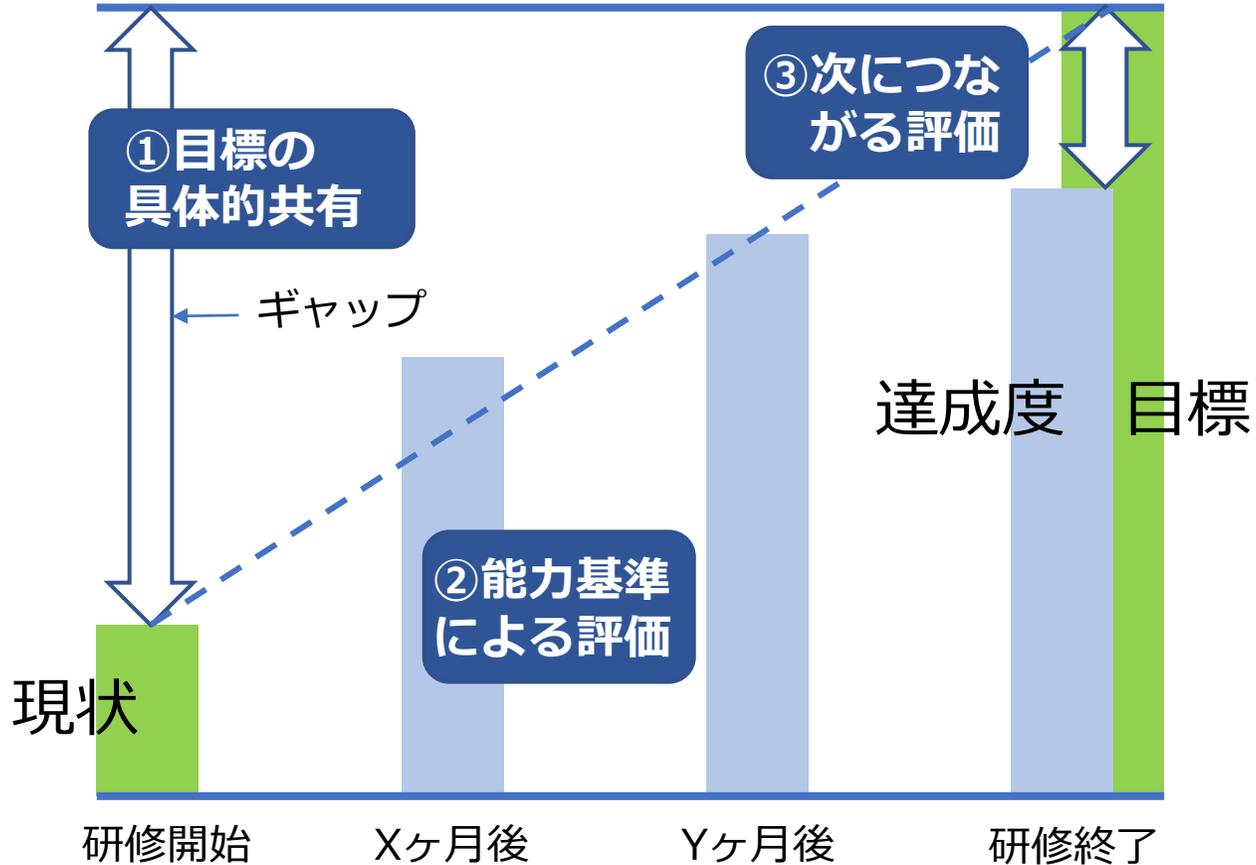


日本語教育を お客様の真に期待するものに

HDS ... 3つのKeyPoint

お客様の期待値



① 目標の具体的共有

能力記述文



ウチではこの人ぐらい話す必要があるね。

定義文やビデオを使って、目標とするコミュニケーション能力を共有



② 能力基準による評価

テスター向けの
チェックポイント公開

言語コミュニケーション
能力をレベル評価

言語の種類		JLPT	TOPIC
レベル	①言葉の量 ②言葉の種類 ③理解率との関係 ④理解率との関係		
A0	A1の2/3の量、かつA1の1/3の理解率		
A1	①②③④のすべてを満たしている。かつ、④の理解率が高い。	<input checked="" type="checkbox"/>	
	⑤自分自身の目的の達成状況について、自信や満足感や不安など、非常に明確に述べられている。	<input type="checkbox"/>	
	⑥自分自身について、聞き手に対して、自信や満足感や不安など、非常に明確に述べられている。	<input type="checkbox"/>	
A2.1	①②③④のすべてを満たしている。かつ、④の理解率が高い。		

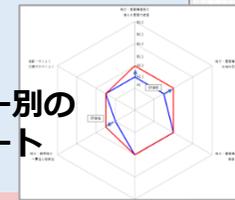


クラス観察、または
インタビューテストで

③ 次につながる評価

能力カテゴリー別の
レーダーチャート

強みと弱みを能力カテゴリー別に
把握して、次の一手を指導



課題は接続表現。

Key Point① 目標の具体的共有

あなたの現場で、こんなことが起きていませんか？

- ！ 目標設定もしないまま、教科書選びやカリキュラム作成に着手
- ！ お客様に聞かないで、講師が勝手に目標設定
- ！ 研修結果がどうしても言えるような、曖昧な目標内容
- ！ 会話能力の向上を目標としたのに、教えることは言語知識が中心

HDSでは

HDSではまず、お客様と研修後の期待レベルを具体的に擦り合わせることからスタートします。就労職場を想定したHDSの具体的な能力記述文は、お客様の研修担当者や職場上司でもある程度理解いただけます。これによって、コミュニケーション能力をどこまで引き上げるかという目標を合意します。

さらに、能力記述文で言っているイメージを補強するために、レベル毎のモデル人物の会話を録画したビデオを視聴いただきます。レベルA2はこんな感じの人、レベルB1はこんな、というように、目標とするレベルのイメージを確認できます。

そうして合意した研修後の期待レベルと現状能力とのギャップを埋めるための手段が、毎回の授業内容となります。

Key Point② 能力基準による評価

あなたの現場で、こんなことが起きていませんか？

- ！ 「会話を上手に」と依頼されたものの、何を基準に上手というのか分からない
- ！ ある講師がその受講者を「上手になった」と評したが、私にはそう思えない
- ！ 結局、筆記形式の小テストで研修結果を測っている
- ！ 今教えていることが、目標に向かっているのかどうか自信が持てない

HDSでは

口頭コミュニケーション能力を評価するには、そのための基準が必要です。それは筆記テストでは必ずしも評価できないものです。

「上手に話せるように」と言う場合の「上手」にも様々なレベルがあります。HDSは、CEFRに準拠しながらも、口頭コミュニケーション能力の評価査定をするに耐えうるように、実用的な工夫を施したものです。今まであるようで無かった評価ツールなのです。

2018年より、企業や介護施設、および留学生に対する日本語教育で、現時点での能力評価や研修成果の評価にHDSを使用し、実績を重ねてきました。

Key Point③ 次に繋がる評価

あなたの現場で、こんなことが起きていませんか？

- ！ 最後は筆記テストの点数だけで進級を決めた
- ！ コミュニケーション能力の評価は、クラス担当講師の裁量次第だ
- ！ 目標は明らかに未達成だったが、何となく言い訳してやり過ごした
- ！ 合格・不合格の評価はしてみたが、どこがどうだから不合格だとはっきり言えない

HDSでは

研修終了時点だけでなく、途中でであっても、習得レベルの確認が可能です。この評価とは、資格試験のように合否だけを決めるものではありません。評価によってその受講者の弱点がどこにあるのかを見える化し、弱点の克服のために次の手を検討する材料とします。「評価して終わり」ではなく、あくまで次に繋げるための通過点なのです。

HDSのテスター養成研修で認定された者が、所定の評価基準と評価プロセスに沿って評価します。研修は数日間。知識習得よりもマインドの変更を促すものです。

なお、テスターであっても、その学習者の担当講師は評価に加わりません。思い入れなく、できるだけ主観を排除した評価とするためです。その学習者に慣れていると、片言だけで言いたいことが理解できてしまい、評価が甘くなる懸念もあります。